

## 周作人と清華園の詩人達

——「小詩」ブームの波紋——

小川利康

### 提要（中文）

周作人在《晨报副镌》，《诗》上曾多次译介外国小诗，引起了一次“小诗热”。虽然这“小诗”后来模仿者过多，多属陈腐之作，招来很多批判，但可以说中国新诗界到此才开始意识到诗的内容与形式的问题。在“小诗热”的诗坛里，最早对此进行批评的就是清华园的诗人，即：闻一多，梁实秋为中心的清华文学社。1922年5月梁实秋在《晨报副镌》上发表〈读《诗的进化的还原论》〉进行批评，认为“诗是贵族的”，反对民众文学，提出唯美主义的观点，说“有些丑不堪言的字句”不应该到诗国里来。这是梁实秋第一次在文坛上参与的论战。据梁实秋的回亿，当时闻一多也把他的处女评论〈冬夜评论〉寄给《晨报副镌》却没有被采用。但是〈冬夜评论〉所提出的主要观点至今可以首肯的。可以说闻一多为了得到当时的诗坛里的支持（包括周作人也在内）在他的评论里付出了相当多的努力。1922年11月，梁实秋自费出版了《冬夜草儿评论》，即遭到文学研究会的攻击。清华文学社的成员在《清华周刊》上发表文章，进行反驳。在反驳文章里重新对文学研究会的新诗（包括小诗在内）进行一次批评，认为新诗也应该重视音韵结构。这些诗论基本上从闻一多的《律诗底研究》得到启发而写的。闻一多在1921年底进行的文学研究会与学衡派的论战的影响之下写成《律诗底研究》。

如上所述、清华園の詩人們在“小詩熱”里反抗，但周作人对有韵新詩的看法仍然冷淡，因为他认为“只要一用韵，格调便都逃不出这个（中国言文的有韵詩的）范围”则“已经作尽了”

## 接点

梁実秋は清華大学を卒業、ハーバード大学でバビッド教授の下で保守主義的傾向を持つ新人文主義文芸を学び、帰国後は新月社のメンバーとして文芸批評、随筆の分野で活躍、文学における階級性を否定して、魯迅ら左翼文芸陣営と対立した。戦後は香港を経由して台湾へ渡り、67年にはシェークスピア戯曲完訳の偉業を成し遂げるなど、数奇な経歴の持ち主であり、88年に没するまで多数の回想録を残している。「憶周作人先生」もその中の一つである。周作人との邂逅がどのようなものであったか、その一節を引いてみる。

私が清華で学んでいた当時、清華文学社を代表して彼（周作人）を訪ねていって、清華での講演を依頼した。あの時代は、若い学生でも紹介なしに直接学者を訪ね、そのうえ講演を依頼し、なおかつ無報酬であっても、失礼などとは考えなかったものだ。今や手続きはもっと簡便になり、電話一本でついぞ面識のない人でも講演などに招くことも往々にしてあるようだが。あの年、かくて私は不躰にも名声を慕い訪ねていったのだ。幾つもの曲がり角をたどって周さんの住まいにたどり着くと、南向きの平屋二棟の住まいがあり、ちょうど雨が降った後で、前庭には大きな水たまりが出来ていて、私は請じ入れられると、軒下の石畳を辿って南の平屋に入った。床にはゴザが敷かれていた。部屋には話し合っている二人がいて、一人は短いひげを生やした魯迅さんで、もう一人の若者は小詩を書く何植三さんだった。（中略）

突然主人が部屋に入ってきた。長衫姿のくつろいだ感じで、猫背気味で伏し目がちの青白い顔色には、短い無精髭が顔一面をおおい、声は小さくて

聞き取りがたいほどだった。使用人がお茶を二杯持ってきた。日本式の蓋付茶碗で、上品に煎れた緑茶だった。私が来意を告げると、彼は最も簡潔な言葉で講演依頼を承諾した。そこで、私はもてなしもそこそこに辞意を告げると、彼は戸口まで私を見送ってくれた（「憶周作人先生」）<sup>(1)</sup>

周作人日記に拠ると、「1922年10月22日梁実秋君来訪、清華文学社での講演を依頼」<sup>(2)</sup>とある。この頃、梁実秋は最上級生で、住まいも北京市内にあったから、周作人宅訪問を買って出たのであろう。何度か手紙の往還の後、この講演会は半年後の1923年3月3日に実現する。その日の題目は「日本の小詩」、日本俳句を紹介するものであった。後でこそ清華大学は聞一多、梁実秋、饒孟侃、余上沅など、数々の詩人、作家、劇作家を輩出することになるが、中等科、高等科八学年合わせても僅か五百人足らずの規模<sup>(3)</sup>であり、決して名門校と呼べる存在ではなかった。「西学」一辺倒のアメリカ留学予備機関（1921年までは清華学校と呼ばれ、大学ですらなかった）として、文学と最も縁遠い学校と目され、聞一多自身も在学中は国文の授業に対する不満を漏らしていた<sup>(4)</sup>。だが、それ故にこそ、もう一方では清華文学社のメンバーは、これまでも梁啓超（22年3月）、徐志摩（22年12月）を招いて講演会を開いている<sup>(5)</sup>。清華文学社主催の講演会の弁士としては周作人で三人目になる。当日、講演を快諾してくれた周作人のために、わざわざ自動車で迎えに行った。これには周作人もさすがに驚いたと見えて、わざわざ日記に「午前中、饒了一（孟侃）が自動車で迎えに来て、清華に行く」と書き残している。まだまだロバや人力車が一般的だった時代で、北京城外にあった清華園は相当遠かったのである。当日は梁実秋らの苦心が実って、会場には二、三百人余りの聴衆が集まり、周の講演を聴いた。だが、残念ながら梁によれば「周先生の声は余りに小さく、訛りがきつすぎ」たため、良く理解できなかったという。五四新文化運動期、周作人は少なからず講演を引き受けているが、他にも類似した感想は見受けられ、有り体に言って、講演は苦手だったようだ。とはいえ、「幸いにも」と梁

実秋は皮肉っぽく言葉を継ぐ。「講演原稿が残っていて、すぐに発表された」ので、後日やっと内容がわかったという。当時の習慣では完成原稿を予め用意し、大学の講義も文字通り「讲义（プリントの意）」を事前事後に配布するのが一般的であったから、かりに聞き取りが困難でも大きな問題にはならなかったのである。牧歌的な時代であったと言えるのかも知れない。

だが、これは梁実秋の手で再構成された物語である。著名な作家とまだ無名だった少年詩人との出会い。梁が描き出す二人の出会いは、後年の「漢奸」問題に触れる前奏曲として、ことさら五四時期の輝かしかった周作人を対照的に描き出そうとしているかにみえる。いま再び関連する文章を拾い上げ、足りない部分は幾つかの資料で補足してゆくと、梁実秋が意図的に触れなかったこと、あるいは記憶の淵に沈み込んでしまった事実が浮かび上がってくる。本稿では当時の周作人が「小詩」に抱いていた理念を梁実秋、聞一多ら清華園の詩人達との関係から明らかにしたいと思う。

## 1. 小詩“熱”

この講演が行われた1923年当時、新詩は徐々に新鮮さを失い、行き詰まりを見せていた。1921年5月の段階でも、周作人は「現在の詩壇は実に消沈としきっている」と述べ、発表作品に比して佳作が少ないとして、次のように指摘していた。

詩の改造は今なお道なかばと言うほかないし、口語体詩の本当の長所を示した者は未だ誰ひとりいない。だから、その土台も決して安定していない。（「新詩」）<sup>(6)</sup>

当時の五四時期の新詩は「作文するように作詩せねばならぬ」（胡適『嘗試集』自序）と考えられていた。このことは錢理群に拠れば二つの方向性が内包されていたという。つまり、「言葉の分かりやすさ」という側面では詩歌の平民化をもたらすものであり、伝統定型詩から「自由であるからには文法に合致

せねばならない」ゆえに、西洋的な「論理的」厳密さが求められるに至った。この結果、「詩の言語形式は必然的に『散文化』せざるをえず、詩の思惟形態も『散文化』、すなわち論理的にならねばならなかった」<sup>(7)</sup>という。このために、散文化した新詩は常に詩と散文の間の見えない境界線を彷徨い続ける宿命を担うことになった。

その意味で1922年以降、タゴールの詩集『飛鳥集』や周作人の翻訳紹介した「日本の小詩」によって広がった小詩ブームは、三、四行で完結する短詩型を中国の新詩に持ち込むことで、「非詩化」する新詩の傾向に一定の歯止めをかける役割を果たしたといえる。この詩型はタゴールの影響を受けた謝冰心が詩集「繁星」「春水」を1923年に刊行するに及んで、小詩ブームとも呼ぶべき多数の追従者を生み出した。この「日本の小詩」も、講演会直後の『清華週刊・文芸増刊』（第五期1923年3月16日刊）に続き、『晨报副鐫』（4月3-5日）、『詩』第2巻1期（1923年4月）にも転載されたが、その流行を裏付けるものであろう。その結果、少なからず駄作が生まれたことも否めない事実だが、初めて詩型の問題を広い範囲で提起したという点でも「過渡的な意義」<sup>(8)</sup>を持つものである。だが、同時に1921年には郭沫若の詩集「女神」が話題を呼び、すでに五四時期の新詩を乗り越える動きは始まっていた。1923年には、その郭沫若によって、小詩は「創造週報」上で盛んに揶揄され、批判を浴びることになる<sup>(9)</sup>。

清華文学社のメンバーは聞一多の影響下で大多数が創造社に共鳴していたが、それは必ずしも、創造社の影響下で彼らの詩論が形成されたことを意味するものではない。むしろ創造社に先んじて早い段階から新詩の散文化傾向に警鐘を鳴らしてきたと評価すべきだろう。「憶周作人先生」では「日本の小詩」について、「松尾芭蕉の作品」が面白く、今でも覚えていると語り、「この種の短詩は新詩を書き始めた人に大きな影響を与え、タゴールの散文詩同様、模倣の対象になりやすかった」と述べるにとどまっているが、若き日の梁実秋は周

作人を含めて文学研究会の詩論を批判する側に回っていたのである。

その動きは1922年春の「醜的字句」に始まるもので、誤訳論争で文学研究会と創造社の対立が表面化する1922年秋以前よりも早い。当時、梁実秋や清華文学会のメンバーは新詩の「散文化」を問題視し、文学研究会だけでなく、周作人に直接批判の声を寄せてきたのである。だが、周作人は彼らの声をそのまま受け入れることなく、「散文化」の傾向に一定の歯止めをかける方策として、「小詩」を最後まで支持し続けた。その経緯がどのようなものであったか、清華園の詩人達の側から順に繙いてみたい。

## 2. 「醜的字句」論争——梁実秋「讀『詩底進化的還原論』」

当時の周作人日記は10月22日に梁実秋が講演依頼に訪れたことを記した後、11月2日に「清華文学社より本を一冊受け取る」と記している。ここで周作人が受け取った本とは、刊行間もない『冬夜草兒評論』（清華文学社叢書第一種）である。聞一多『『冬夜』評論』と梁実秋『『草兒』評論』を併せて一冊としたものである。そもそもこの詩論が世に出るまでにどのような経緯をたどったかは、梁実秋「談聞一多」に詳しい。

この文章（「冬夜評論」）の元原稿は呉景超が浄書し、孫伏園主編の『晨报副鐫』に送ったが、なんと返事の一つも寄越さず、掲載されぬどころか、何度手紙で頼んでも原稿すら返却してくれなかった。幸い元原稿は残してあった。そこで私は思いきって「草兒評論」を書き、「草兒」は康白情の詩集で、当時「冬夜」と並んで有名だったので、二つを併せて『冬夜草兒評論』と名付け、私個人の金で琉璃廠公記印書局に印刷させ、「清華文学社叢書第一種」とし、民国十一年（1922年）十一月一日に出版したのだ。<sup>10)</sup>

聞一多は清華大学で梁実秋とともに清華文学社の一員として、詩を書いては見せ合い、批評しあった仲間である。聞の方が学年でも、年齢でも上であった

から、文学仲間にはみな聞一多を「大哥」（兄貴）と慕い、尊敬していた。「冬夜評論」は聞一多にとっても、初めての本格的詩論で、1922年5月頃に脱稿している<sup>(11)</sup>。同じ5月には、梁実秋も『晨报副鐫』に兪平伯の詩論批判を投稿し、周作人らと論争しており、本来梁実秋、聞一多二人同時に参加する意図で投稿したのであろう。ところが、結果は梁実秋の原稿のみ採用され、孤軍奮闘することになった。梁にとっては初めて外部に詩論を発表したもので、当人がまったく言及していないのは不思議なぐらいだが、周作人はこの時に梁実秋の名前を初めて知ったのである。その論争（以下では「醜的字句」論争と呼ぶ）がどのようなものであったか、二人の関係を見ておくためにも、その論争から見てゆくことにする。

1922年当時、『詩』と『晨报副鐫』では「民衆文学的討論」というテーマを掲げて議論している最中であつた。兪平伯はそのなかで「詩底進化的還元論」を発表、「良い詩の効用は多くの人を深く感動させ、善に向かわせるものだ」という定義のもと、詩のもたらす社会的な価値を重視し、芸術は本来的には平民のものであるとして、原点に立ち返り（「還元」）、さらなる「進化」を目指すべきだと唱えた。道徳的な「善」を詩と結びつけているのは、当時トルストイの「芸術論」の影響を受けていたあらわれであり、間接的には師と仰ぐ周作人の影響も受けている。

だが、この主張に対して、周作人は持論を自ら否定して、「私たちが不満なのはこの時代の平民文学の思想（元曲を指す）があまりに現世的功利的で、現代を超越する精神がないことである」（「貴族的与平民的」）として、こうした「求生」の精神は人間性の一部と認めつつも、現世を超越する貴族的精神なくして文学は成功しないと説き、詩人自身の内心の自由を犠牲にして芸術の社会的な意義を実現しようとするのは本末転倒であり、あくまでも出発点は個人であつて、「人々が言いたくても言い表せない言葉」を表現した結果として詩は広く普遍性を獲得し、人々に共有されるに過ぎないと述べる。さらに「善」の

定義にしても「現代行われる道徳観念による善だとしたら、不合理な社会における一時的慣習にすぎず、決して芸術価値判断の基準には出来ない」（詩的効用）として、兪平伯ら文学研究会メンバー全体が標榜する「民衆のための文学」傾斜を戒めている。

この周作人の意見に対する兪平伯の反応は困惑に満ちたものであった。自ら師と仰ぐ周作人自身の「平民的文学」（1920年）に依拠した論文に対して当人から反論されては論争にならない。このため、兪平伯の弁明とも反論ともつかぬ文章が掲載されて終息するかに見えた。だが、そこに梁実秋も加わって、論争は迷走しはじめた。梁は「芸術は善悪を超越して存在する」として、「芸術には美醜が存在するだけだ」と述べ、善悪の観念などより美醜の概念の方が明瞭に芸術価値を測る基準だと主張する。したがって、その美の価値を社会的効用で測ることなど論外である。さらに「平民」のための詩を標榜する兪平伯に対し、万人に理解される詩を書こうとするなど徒勞であり、詩人は永遠に社会の周縁に立つもので、詩人の故郷は現実社会からずっとかけ離れているのだと指摘する。だから、

（詩人は）「民のなかへ師を求めに行く」というよりも、「誰もいないところへ仙境を求めて（求仙）ゆく」というべきだ。現在詩作に励んでいる者の大半は詩の内容に対して余りにも不注意である。彼らは何が美で、何が醜なのか考えてもいない。（讀『詩底進化的還元論』1922年5月27日—29日）

さきの周作人の論と比べ、梁実秋は極めて明快である。「詩は貴族的なもの」であり、詩作という営為は美か醜かで測られる。だからこそ、「共産主義、無産階級、革命、電報、社会改造」などの語彙は「言うだに汚らわしい」（「醜不堪言」）として詩に用いてはならないと説く。唯一周作人との接点といえるのは、「平民」の文学に警戒感を示す点であるが、詩人を美の創造者として絶対化しているため、方向性が相当異なる。当時、周作人自ら語るように



「平民のための文学」に傾斜した「人生のための芸術」にも必ずしも同意しないとしても、「芸術のための芸術」といった唯美主義的な立場にも与するものではなかった。

このため周作人は反論として、詩語に「汚らわしい言葉」（醜的の字句）などあり得ず、詩人の自由であるべきだと述べ、石川啄木の文章を翻訳紹介している。

土岐哀果君が十一月の「創作」に発表した三十何首かの歌は、この人がこれまで人の褒貶を度外に置いて一人で開拓してきた新しい畑に、漸く楽しい秋の近づいてゐることを思はせるものであつた。その中に、

焼けあとの煉瓦の上に

syoben をすればしみじみ

秋の気がする

といふ一首があつた。好い歌だと私は思つた。（石川啄木「歌のいろいろ」）

この啄木の文は更にこの歌がある雑誌で批判を受けているのを知って意外に思ったが、歌に syoben（小便）のような日常語を使うことに反対する人は「屹度歌というものに就いて或狭い既成概念を有つてゐる人に違ひない」としてゐる。この文を踏まえ、周作人は次のように締めくくっている。

『世界中のあらゆる事物』は、みな詩に入れてよいが、使い方は詩人の自由に任せるべきである：我々がどの字句を詩に入れてはならない、どの字句を入れなければならないと決めることは出来ない。（「醜的の字句」1922年6月2日）<sup>12</sup>

これに対し、梁実秋は再反論し、「もし仲密（周作人）先生が『世界上の事物はみな詩に入れられる』と言われるなら、世界上の事物はみな美しいと認めることになります——詩に求められるものが美だと認めたい話ですが」として、世界中の事物が美と認められることはあり得ないと繰り返し述べてい

る。どうやら自らの主張を述べるのに急な余り、「汚らわしい」言葉を詩語に入れる是非が問題なのではなく、個人の審美観で詩語を制約すること自体が問題だと気づかなかったようだ。その上で、「私も自分の言うことが『学衡派』の疑いをかけられることは分かっています」としながらも、「静かで美しく詩的な東方文化を提唱したい」ので、周作人の見解には同意できないと述べる（「讀仲密先生的『醜的字句』」1922年6月25日）ように、明らかに議論のポイントがずれている。

ここで梁実秋のいう「学衡派」とは南京の東南大学で刊行される雑誌「学衡」に拠る文学者達のことを指し、口語体自由詩を非難し、伝統的な格律詩への復帰を唱えていたグループである。梁実秋も『文学旬刊』『晨报副鐫』を通して、論争の内容は承知しており、学衡派＝復古派というレッテルを貼られるのを警戒したのであるが、そんな余計な予防線にも周作人は嫌気がさしたのかも知れない。結局、周作人の返答は「双方の意見の隔たりが大きすぎて、互いに理解し合える可能性がないので、もう何も言いたくありません」（通信1922年6月30日）という、そっけないものだった。

### 3. 不発に終わった論争——聞一多「冬夜評論」投稿

一方、聞一多の「冬夜評論」は五月始めには脱稿し、二週間後の5月22日には北京を発ち、アメリカ留学に出発している。この頃、家族にあてた手紙（1922年5月7日）で、詩集『紅燭』を直ちに出版するつもりであったが、「これまで、どこの雑誌にも名前を出したこともなく、いきなり詩集を出しても、多くの人の注目を集めるとは思えない」と考え、まず詩論を書いて、出版しようと考えていると述べ、その構想を次のように紹介している。

私は今『新詩叢論』という本を書き始めた。この本の前半では芸術と新詩に対する私の見解を述べ、後半では『嘗試集』『女神』『冬夜』『草兒』（『冬夜』は兪平伯の詩、『草兒』は康白情の詩で既に出版）及びそのほか

の詩人について批評する。『冬夜』の批評はもう既に仕上げたが、この一章だけで、全部で十章になる<sup>13</sup>

この手紙だけでは、脱稿した時期は5月7日以前としか分からず、いつ頃投稿したのかも確定しようがないが、梁実秋の「讀『詩底進化的還原論』」の脱稿が5月11日で、掲載日が5月27日であることから、5月なかば頃と考えられる。この頃の書簡の中でも述べるように、『晨报副鐫』へ投稿した目的は詩集「紅燭」を刊行する前に外部の雑誌にも自らの名を知らしめたいと考えたからである。「冬夜」だけ先に書き上げられ、残りの章は後回しにされたのは、梁実秋の投稿文と歩調を合わせるためであろう。だからこそ、この「冬夜評論」は攻撃的な言葉で始められたのである。

彼らは叫ぶ：「詩壇の空気は余りに寂寞だ！」そこで「冬夜」「草兒」「湖畔」「蕙底風」「雪朝」が相次いで出版された。沈んだ空気は果たせるかな賑やかなものとなった。ああ、結局のところ、賑やかしにすぎないのだ。

だが、攻撃的な口調が随所に見られる一方で、作品の評価そのものは批判だけでなく、肯定的な評価も随所に含まれ、今日的に見ても首肯できる点が多い。例えば、宋詞元曲に学んだ美しい音節を称え、その欠点はむしろ、その美しさを意識的に高める努力をしていないだけであると指摘し、評論の総括においても「その根本的な誤りを求めるならば、やはり、あの『詩底進化的還原論』にある。兪さんは才能がないのでも、学力がないのでもない」と述べている点を指摘すれば、明らかであろう。攻撃の対象は兪平伯その人というよりも「詩底進化的還原論」で示される、「平民のための文学」「善へと導く芸術」論であり、執筆の動機も梁実秋の「讀『詩底進化的還原論』」と軌を一にするものであったことが分かる。冒頭の攻撃的な文章は次のように続けられている。

とりわけ最近、私は詩神が踏み入ったのは迷路ではないのかと考えている。だから、より厳しく、早く戻るよう呼びかけるのだ。その迷路とは畸形的に蔓延する民衆芸術である。そいつを鼓吹するようになったのは今日

に始まったことではない。だが、いまや蔓延した効果が明白に表れ、馬脚を露呈しだした。おのれの失敗の結果を証拠とし、この論の罪状を責めれば、群衆も明瞭に理解できようし、批評家としての口数も省けるといふものだ。早くに口を開けば精力の無駄、遅くなれば、今度は間に合わないかも知れない。今こそが潮時だ。

「今こそ」とは投稿した五月のことであり、周作人からも兪平伯の詩論に疑問が投げかけられたため、絶好の機会が訪れたと考えたのである。文中、梁実秋の文章にも言及している<sup>14</sup>ように、論争に同時参加することを意識して書かれた文章であることは疑いを容れない。

また、この論文の周到さは引用にも表れている。ワーズワース、キーツから A. ウェリー、W.A. ネルソンなど数多くの引用は論争を意識しているだけでなく、兪平伯のみならず、文学研究会のメンバー達を説得するための理論武装と考えられる。なかでも、興味深いのは、詩を書くためには言語を工具として使いこなす困難さを克服せねばならないと説く一節である。ここで聞一多は困難の克服が喜びに繋がるのは自虐症（マゾヒズム）で説明できると指摘し、わざわざ A. モーデルの著書<sup>15</sup>に言及している。この著書は当時批判を浴びていた郁達夫の短編小説「沈淪」を周作人が弁護する際に引用紹介したもので、聞一多はほぼ同じ箇所を参照引用している。僅か二ヶ月前の『晨报副鍰』紙上に掲載された周作人の文章を読んでいないとは考えられず、周作人の存在を意識して引用したのだと考えるのが自然である。この点でも、当時の聞一多が自らの主張が認められ、評価されるために周到な努力をしていたことが窺われる。

#### 4. 「学衡派」の影——『清華週刊』での反論

こうした周到な努力にもかかわらず、聞一多の投稿は実際には『晨报副鍰』に掲載されることはなかった。内容からの判断なのか、それとも分量が多すぎたからであるのかは不明だが、周知の通り、『晨报副鍰』は文学研究会の牙城

であり、兪平伯は中心的なメンバーの一人であった。主編孫伏園にしても魯迅、周作人の門下生であり、彼らは師弟、友人関係にあり、商業紙とはいえ、いわば仲間内の文芸誌である。無名の学生からの投稿を受け入れるほどの雅量はなかったと考えるべきだろう。

かくて没となった著書は梁実秋によって自費出版され、今度はわざわざ当事者の周作人に送っているのは一見すると不可解だが、聞一多の文章にも窺われるとおり、周作人の支持が得られるという期待も込められていたに違いない。だが、周作人はともかく、大方の反響は彼らが期待していたとおりには運ばなかった。刊行後まもなく、『時事新報・文学旬刊』、『努力週報』に刊行を伝える短い記事が掲載されたが、揚げ足取りとしか読めないコメントが数行載っただけだった。まさしく聞一多自身の言葉どおり「雑誌新聞で名前すら出たことがない」ために受けた批判だとしか理解できないものである。聞一多自身、この時のことを家族宛の手紙の中で次のように述懐している。

『冬夜草兒評論』は郭沫若、創造社のような才人と知り合えたことを除けば、失敗だと言えるでしょう。私はずっと引っ込んでいて、学校外の雑誌に名前を出したことは一度もないのですから、いきなり自力で単行本を出すといっても、確かに突飛で少々大胆すぎでもあったのです<sup>16</sup>。

この時、聞一多自身はすでにアメリカ留学中であつたが、手紙でも繰り返し「冬夜評論」のことを尋ねており<sup>17</sup>、強い期待を持っていたことが窺われる。このため事情を知る清華文学社のメンバーはこの冷ややかな反応に憤懣やるかたなく、自前の雑誌『清華周刊』で強く抗議している。例えば、呉景超は「このほか（上記の刊行物）に手紙で批評してくれた方に郭沫若君と胡夢華君がいる」と紹介しながら、現在の新詩の有り様を批判する。

詩体解放以後、雑誌、新聞紙上に粗雑浅薄な創作が急にたくさん出てきた。他人が粗雑浅薄な詩を書こうと私は反対などしない——幼稚な作家には高雅な作品など書けないのだから——だが、粗雑浅薄な詩を發表したう

えに、その詩が新詩であって、新詩の代表そのものだと考える輩には反対する。(「讀冬夜草兒評論」)<sup>18</sup>

ここで批判の対象となっているのは、いうまでもなく兪平伯、康白情をはじめとする文学研究会の詩人達であるが、呉景超がやり玉に挙げた詩とは「ロバの緑の小便を見れば／なぜとはなしに思う／ロバは何を食べているのだろう」というものだった。この駄作としかいいようのない小詩をわざわざ引いて見せたのは、詩に「小便」という言葉が含まれていたからである。まさしく梁実秋が論争の中で指摘した「言うだに汚らわしい」(「醜不堪言」)の好例が『晨报副鐫』に載っているのではないかというわけである。批判の矢は明らかに文学研究会だけでなく、周作人にも向けられていると考えなければならないだろう。

呉の批判は更に当時の新詩の欠点を明瞭に描き出している。

詩体が変わっても、詩の構成要素まで変わるわけでないことを知らねばならぬ。情感、想像、音節は詩に不可欠な要素である。我々は下らぬ旧詩に反対するが、それは情感、想像が欠けているからで、朗読してみるとリズムミカルに響くものの、仔細に見れば全く味わいが無い。だから、もしも新詩が旧詩に取って代わるか、新たな領土を開拓しようとするなら、上述の要素の全てを考慮すべきで、捨てて顧みないことがあってはならぬ。しかし、残念なことに現在詩作をする者の多くは誰もこの道理が分からないのである。(「讀冬夜草兒評論」)<sup>19</sup>

先述のように、文語によって営々と築かれてきた詩語と格律という大きな遺産を捨てるところから新詩は出発せねばならなかった。このため、五四時期は詩そのものを書くよりも、口語で書くことが何よりも優先されてきた。同時に、口語詩を書くための理論的模索も進められたものの、その多くは「精神の自由」を表現するためには「自然な音節」が重要であり、伝統的詩型の人工的な音律は排されねばならないという胡適の発想の域を出るものは少なかった。ほとんど無条件に「無韻詩」すなわち「新詩」という認識が肯定されていたの

である<sup>(20)</sup>。だが、「自然な音節」だけでは、詩が詩たりうるための必要条件としては余りに貧弱と言わねばならない。そこで、呉景超は新詩に旧詩が持っていた音楽性を取り戻す必要を指摘したのである。同様の問題点は、同じ号の『清華周刊』で、梁実秋も指摘している。

中国新詩の音韻の問題は現在研究に値するテーマの一つである。試みに中国の旧詩を朗読すれば内容はどんなに軽薄陳腐であろうと、声調はリズムカルで耳に心地よい。だが、新詩はそうならず、内容が極めて斬新で温雅なものであっても、朗読すると音楽的美しさが感じられない。自由詩を主張する者は音韻が詩の外的な付加的要素で、詩は音韻から切り離しても存在しうると考えているが、この主張は詩の音韻的役割を全く理解できていないのだ。(「詩的音韻」)<sup>(21)</sup>

旧詩の持つ格律の再評価は清華文学社の詩人達に共通する立場といえそうである。これは文学研究会系の詩人だけでなく、「冬夜草兒評論」を高く評価した郭沫若らにも見られないものである。この特異な詩論の形成は聞一多によるところが大きい。1921年末には早くも清華文学社で A Study of Rhythm in Poetry という口頭発表を行ったほか、アメリカ留学に旅立つ直前の1922年春には「律詩底研究」(当時未発表)を書き上げ、伝統的格律詩の価値を再検討するべきだと述べていたのである。いずれも雑誌に未発表であるため、大きな影響力を持つには至らなかったが、清華園の中では日常的に未発表原稿を交換しあって批評するのが常であり、そのなかで共通の詩論を形成するに至ったのだと考えられる。当時、数多くの詩人小説家を輩出し、さながら新文学の搖籃となった觀のある北京大学から遠く離れ、北京西北の清華園にあって、交通の不便さは現在以上に文化的にも心理的にも距離感を産み、その距離感が彼らに新しい詩論をもたらしたと言っても良いだろう。とはいえ、聞一多自身にしても孤立隔絶された環境の中で自らの詩論を紡ぎ上げたとは考えられない。格律詩の価値を再評価させる契機は外部にあったと見なければならぬだろう。

1921年末の新詩をめぐる状況のなかに影響を与えたファクターはあると考えるべきである。

唯一無二ではないにせよ、その影響を与えた大きなファクターとして指摘できるのが、学衡派との論争である<sup>22)</sup>。いみじくも梁実秋が「醜的字句」論争の中で、自ら学衡派でないとは明したように、当時の詩壇にあっては良く知られた論争であった。南京・東南大学の雑誌「学衡」では胡適「嘗試集」を批判し、伝統的定型詩への回帰を唱え、新詩がなぜ伝統詩型に取って代わるべきなのか理論的根拠を改めて問い直した。「精神の自由」を表現するにせよ、それが定型詩では表現できない理由はないとして、欧米文学の例を示し、散文と何ら変わらぬ無韻詩以外は排除される現状は異常であると糾弾した。かつて胡適によって新詩提唱が行われた時期、伝統詩擁護派は欧米文学思潮に通じぬ旧式文人だけであり、事実上論争そのものが成立しない状態であったが、学衡派は胡先驌、吳宓など皆アメリカ留学経験者であり、欧米文学思潮にも良く通じていた。とりわけ葉聖陶、鄭振鐸、茅盾らが論争に加わった「骸骨之迷惑」関連の論争（1921年11月から1922年4月まで断続的に続く）<sup>23)</sup>では学衡派の反論に十分な説得力のある意見を提示できないまま尻すぼみに終息している。例えば、学衡派の一人、繆鳳林の発言を見てみよう。

よしんば旧詩は韻律が厳格であるというなら、私は寛容なものに換えてもよいと思う。(中略)もしそれでも韻律が厳格であれば、新しい韻律を作ったところで、何も悪いことはない。ただ、その新しい韻律にしても、せいぜい各種韻律の一つにすぎず、一つの形式だけで全てを尽くすことは出来ないし、その形式だけを尊重し、他を排するわけには行かない。(「旁觀者言」)<sup>24)</sup>

この論争で注目すべきは、学衡派が伝統詩の優位性を強調しつつも、盲目的な継承ばかりを唱えていたわけではなかった点である。むしろ学衡派の中には儒教道徳を絶対化する者もあったが、繆鳳林の発言のように極めて理知的な意



見が大勢を占めており、聞一多がこの論争から示唆を受けた可能性は極めて高いだろう。「律詩底研究」では、旧詩を批判する者を「桀犬吠堯，一唱百和，是豈得為知言哉？」（親分に忠義を尽くそうとばかりに，一人が批判すれば皆が唱和するが，道理を弁えた言葉といえるだろうか？）と述べて，律詩にも学ぶべき点があると訴えている。次のような一節はまことに学衡派の主張と通じ合うものがある。

今の世にあって，律詩を真似るべきかと問われれば確かに答えにくいだが，もしも真似るべからずと，壁の棚に束ねて研究すらせぬとは，食事を喉に詰まらせ絶食するのに等しい。文学は確かに時代に応じて形式を変えるべきだ。この20世紀においてはなおのこと，文学は世界の流れを取り入れるべきだ。だから，西洋文学に学んで詩体を改革したのは，卓見と認めざるを得ない。だが，改革に改革をしたところで，結局は中国詩を捨て，西洋詩に代えるわけには行かぬ。改めるべきは改めるとしても，残すべき中国芸術の特質は埋没させるべきではない<sup>25)</sup>

この考え方は，アメリカ留学中も弱まるどころか，むしろ強固なものとなっていたことは「太戈爾批評」（1923年12月）に「我々の新詩は十分空虚で，繊弱で，理知に偏りすぎているのに，もしもタゴールの影響（小詩を指す：小川）が加わったら，今以上にひどくなる」<sup>26)</sup>と嘆いていることから窺われる。

## 小結

以上のように，周作人を講演会に招いた清華文学社のメンバーは文学研究会，そして周作人の詩論に決して同意していなかった。むしろ敵対的であったとすら言わねばならないだろう。にもかかわらず，周作人を訪ねて講演を依頼したのは，自らの詩論によって，当時の新詩をめぐる状況を変えようとしていたからに他ならない。そして，その努力は聞一多「律詩底研究」が書かれた1922年春から始まり，「醜的字句」論争，単行本『冬夜草兒評論』に至るまで

一貫している。しかしながら、その努力はここまで見てきたように必ずしも報われたとは言い難い。

その大きな原因は「醜劣の字句」に見られる唯美主義的文学観への反発だけでなく、韻律を重視する清華文学社のメンバーに対する懐疑も介在していたように思われる。例えば、「口語体の無韻詩は少し年若いがために、まだ人々から冷視されているが、これも遅かれ早かれ解決する問題に過ぎず、詩宗の衣鉢は結局彼のものとなるのだ」としたうえで、その理由として「古代の旧詩には確かに多くの新詩よりも良い作品があるが、現代では誰も作ることが出来ず、しかも既に作り尽くされているからだ」（「読『草堂』」1923年1月）<sup>27)</sup>と述べる。ここでの無韻詩は必ずしも小詩に限定されるものではないが、新詩が無韻詩であるべきことについて、周作人の確信は揺るがなかった。では、もし有韻の詩を作ればどうなるかと周作人は考えていたのか。

例えば、無韻詩という問題を論じるとして、歴代の韻文の成果、詩経国風から小調（小唄）に至るまでを見れば、——民衆文学には新しい作品があるものの、その伝承された格調の源流はとても古い——中国の言文における有韻詩の成果とその変化がもたらしうる様々な形式を知ることが出来る。その後新たに作られたものは、よしんば思想が些か異なっても、韻を用いるかぎり、格調はその範囲から逃れることは出来ない（「古文学」）<sup>28)</sup>。

この意見を踏まえれば、旧詩だけではなく、有韻詩一般について全て「既に作り尽くされている」というのが一貫して変わらぬ認識であった。この文章は直接学衡派を名指ししていないものの、発表時期が1922年3月であることから、学衡派との「骸骨之迷恋」論争で無韻詩が批判されたことを念頭に置いていると思われる。この認識が揺るがぬ限り、梁実秋や聞一多の批判は個々の作品レベルの問題として退けられていたのであろう。新詩が口語無韻詩であるべきだという主張は、後に廃名によっても繰り返し主張されている。

要するに、中国の嘗ての詩文学を改めて考察するのは、今日我々が白話の

新詩を語る上で大事な手続きである。我々はこれによって裏付けを得ることができ、これによって、我々は慌てることもせずに済む。新詩の歴史のうへで韻律の問題にしがみついている放さぬというのは、私が思うに慌てている心理の表れだからだ。我々はただひと言、白話の新詩は散文の文字で自由に詩を書くことである。ここでいう散文の文字とは新詩の中では散文のフレーズでなければならぬということだ。(「談新詩」)<sup>29</sup>

この「談新詩」は1935年から1937年にかけて北京大学で行われた講義をまとめて刊行したものである。兪平伯とならんで周作人門下として知られる廢名の主張だけに、この主張は周作人の韻律への忌避と深く関わるものと考えられる。呉曉東<sup>30</sup>によれば、「散文化」とその対極に位置する「純詩」化は交互に消長を繰り返しながら、中国の近代詩は発展を遂げてきたとされる。それは単純に「大衆化」(＝散文化)と「純詩」(＝大衆離れ)という対立項だけではとらえきれない問題があると思われるが、今後の課題としたい。

2001. 12. 15 北京大学勺園にて

- 注(1) 「憶周作人先生」『梁实秋怀人丛録』(中国广播电视出版社1991年2月)所収  
 (2) 『周作人日記』中卷(大象出版社1996年6月)  
 (3) 『从清华学堂到清华大学』(三联书店2001年4月)  
 (4) 聞一多「中文課堂底秩序底一斑」(『清華周刊』214期)引用に当たっては「《清华周刊》数据库」<http://net.lib.tsinghua.edu.cn/database/>を参照させていただいた。関係者のデジタルアーカイブへの熱意に敬意を表したい。  
 (5) いずれも梁実秋「記梁任公先生的一次講演」,『談徐志摩』による。ただし、梁啓超の講演時期については誤記がある。  
 (6) 周作人『談虎集』(岳麓书社1989年1月)  
 (7) 钱理群『周作人论』(上海人民出版社1991年8月)「十五、周作人与五四诗歌艺术思维的变迁」(一)  
 (8) 钱理群・温儒敏・吴福辉『中国现代文学三十年(修订本)』(北京大学出版社1998年7月)第六章新詩(一)による。なお、同書では「散文化」によって、その特徴を概括しているが、龍泉明『中国新詩流変論』(人民文学出版社1999年12月)では「非詩化」と表現している。  
 (9) 钱理群『周作人论』「二十二、周作人与文研会,创造社同人」(四)  
 (10) 「談聞一多」『梁实秋怀人丛録』

- (11) 季镇淮『闻朱年谱』（清华大学出版社1986年8月）
- (12) 梁实秋は「世界上のあらゆる事物の多くは詩に入れられない」と述べていた
- (13) 具体的には弟宛の書信『聞一多全集』（第十二卷）所収「21. 致闻家驊」。この「新詩叢論」全体の構想は実現しなかったが、郭沫若『女神』については「女神之時代精神」「女神の地方色彩」がある。
- (14) 『聞一多全集』（湖北人民出版社）第二卷P.81
- (15) Albert Mordell "The Erotic Motive in Literature" 1919 (London, New York) 邦訳も1923年6月に『恋愛と文学』（岡康雄訳，文明書院刊）が出ている。
- (16) 『聞一多全集』第十二卷「1923年3月20日致闻家驊，闻家驊转合家信」
- (17) 『聞一多全集』第十二卷「27. 致吴景超，翟毅夫，顾毓琇，梁实秋」「32. 致梁实秋，吴景超」など
- (18) 『清華周刊』264期（文芸増刊2期）署名は景。
- (19) 『清華周刊』264期（文芸増刊2期）
- (20) 例えば胡適「談新詩」（『星期評論』5号，1919年10月），康白情「新詩底我見」（『少年中国』1卷9號，詩學研究號（二）1920年3月）など
- (21) 『清華周刊』264期（文芸増刊2期）
- (22) 学衡派との影響関係については、『現代文学三十年』第六章新詩（一）P.143では、「興味深いのは、聞一多が『格律は芸術に必須の条件であり，まことに芸術そのものが格律なのだ』（詩的格律1926年）と強調した際に，我々は自ずと梁啓超と学衡派の当時の類似した主張を思い出してしまうことである」と指摘し，詩における格律の重視は学衡派などを經由して聞一多に継承されたのではないかと指摘し，理論的な宋詩が現代の新詩に及ぼした影響を論ずる葛兆光「从宋诗到白话诗」（文学评论1990年4月）の言葉を引いている。
- (23) ここでは論旨の関係上詳しく論じることが出来ないので，発表年月順に主だった文章と作者名を記しておく。いずれも「文学旬刊」掲載のものである。一部ペンネームについては通常の名前をカッコ内に示した。
- 1921年11月 「骸骨之迷戀」斯提（葉聖陶）
- 1921年12月 「對於《一條瘋狗》の答辯」守廷，「一條瘋狗」薛鴻猷，「詩壇の逆流」撲向，「看南京日刊裏的『七言時文』」東，「由《一條瘋狗》而來的感想」赤，「旁觀者言」繆鳳林，「論散文詩」Y.L（劉延陵），「讀《旁觀者言》」臺靜農，「對於舊體詩的我見」吳文祺，「為新詩家進一言」王警濤
- 1922年1月 「論散文詩」西諦（鄭振鐸），「又一旁觀者言」幼南，「駁《旁觀者言》」吳文祺，「我的詩說」鄭重民，「讀了《論散文詩》以後」王平陵
- 1922年2月 「《又一旁觀者言》的批評」吳文祺，「評梅光迪之所評」郎損
- 1922年3月 「駁反對白話詩者」郎損（茅盾）
- 1922年4月 「駁郎損君《駁反對白話詩者》」錢鵝湖，「答錢鵝湖君」郎損
- (24) 「文学旬刊」第22期，1921年12月11日
- (25) A Study of Rhythm in Poetry, 「律詩底研究」いずれも『聞一多全集』第十卷所収。引用は第六章第七節「律詩底作用」。なお，管見の限りではこの「律詩底研究」について最も早く言及したのは楠原俊代「聞一多の『律詩底研究』について」（日本中国学会報第38集，1986年）かと思われる。また，鈴木義昭「聞一多『本学年く週刊』里的新詩」とA. ウェイリイ「The Romantic Movement in English Poetry」（『中国文学研究』25号，1999年）でも言及がある。
- (26) 『聞一多全集』第二卷
- (27) 陈子善，张铁棠编『周作人集外集』（上）（海南国际新闻出版中心1995年5月）

- 28 周作人『自己的园地』（人民文学出版社1988年4月）
- 29 废名『论新诗及其他』（辽宁教育出版社1998年3月）
- 30 吴晓东「从“散文化”到“纯诗化”」（『中国现代文学丛刊』1993年3期）

\* 本稿は2000年11月27日に開催された聞一多学会での口頭発表「聞一多における初期詩論の形成——『骸骨之迷恋』『貴族的与平民的』論争をめぐって」を基礎としている。当日貴重な意見を下さった鈴木義昭先生に感謝の意を表したい。